僕らがいる世界

櫻木 織人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕らがいる世界

【Ｎコード】
Ｎ７７７２Ｈ

【作者名】
櫻木　織人

【あらすじ】
気がついたら、帝都を中心に広がる異世界に来ていました。帰り方を探すわけでもなく、何年もこの世界で過し、すっかり順応してしまった主人公。そんな彼が、自分を育ててくれた村を守る為に新米ハンターになりました。そんなところから物語は始まります。――これは、モンスターハンターシリーズを基にしたＦＦです。オリジナル要素がかなり多めに仕上がっています。どちらかと云うと、狩りより、恋愛などのストーリー重視です。（不定期更新になります）

Ａｃｔ．０　プロローグ（前書き）

はい。みなさんおはようございます。
または、こんにちは。或いは、こんばんは。櫻木織人といいます。
以後、お見知りおきを。
……、えっと、今回が初投稿です。その癖、この作品を含め、３作品同時連載と云う生意気なことをします。１つの作品だけに集中すると、書けなくなってしまう性質なのです。ですから3作品の内、気分次第でどれかを更新します。なので、更新速度が、えらいこっちゃになります。
そのことに関して、まずは謝辞を。読者のみなさま、本当に、御免なさい。できるだけ早い更新を心がけますので、見捨てないで下さい。

この作品に出てくる人名、地名、団体名等は、あくまでフィクションであり、事実とは関係ありません。

Ａｃｔ．０　プロローグ

弱い雨が未だ降り続ける密林。

川の流れは治まったものの、氾濫していて正規ルートを通ることができずに川縁を大きく回る形の迂回ルートを通る竜車が一台。

荷台を引く“アプケロス”と云う名の草食竜を慣れた手つきで操る騎手の顔には疲れがありありと見て取れた。

「運がねぇよな」

荷台から深紅の髪の男が顔を出して、騎手に話しかける。

「正規ルートが通れれば、もう家でニーナの飯に有りつけてる頃だってのに」

３０を過ぎた男だというのに、拗ねたように唇を尖らす姿はまるで子供だ。

騎手の男は、相棒であるこの男のことを気味悪げに見て、顔を歪ませた。

「ガキか、お前は。　気持ち悪い」

別段、相棒のことを嫌っているわけではないし、コンビを組んで仕事に出るようになってもう長いのだが、この実年齢と、言動や行動が、いまいち噛み合わないところに慣れることができない。

「ジル、お前のほうが年上なんだ。いい加減しっかりしてくれ」

「年上たって、２つしか違わねぇじゃねえか。それに―」

にやり。とジルは笑って、

「―お義兄さん。は、お前だろ？イデア」

そう言った。

イデアは嘆息した。そうなのだ。イデアの妹のニーナは、このジルと結婚している。

「その呼び方やめろ。義弟」

そう冗談で言ってやると、ジルは身震いした。
「うわ、鳥肌たった！」
「だろう？」
「義弟って呼び方ヤメレ」
「なら、お義兄さんって呼ぶなよ」

―プロローグ―

それから１０分ほどたったころ。
仕事が終わってからまだ一睡もしていないイデアは流石に眠くなり、出てきた欠伸を噛殺し、竜車を止めた。
「おいジル。そろそろ代わってくれ。眠い」
声をかけて荷台を覗き込む。
ジルは、今回の依頼にあった獲物から剥ぎ取った素材を物色していたようで聞こえていなかったらしく、荷台を覗き込んだイデアに、どうかしたか？と声をかけた。
「眠いんだよ。代わってくれ」
「んあ？…あぁ。了解」
ジルは荷台の積荷を傷つけないように避けて外に出る。

「手綱、貸して」
「ほらよ」

ジルに手綱を渡し、荷台に入り込もうとした時、イデアの視界に川を流れるなにかが映った。
布切れとも違う。なにかのモンスターの死骸。と、云うわけでもない。どちらかと云うと――
「なぁ、ジル」
「あぁ？なんだ？」
川の中腹あたり、漂っている“何か”を指差す。
「――あれ、人間だよな」
「うえっ？…マジか！？」
イデアが指差す方向に目を凝らしてみると、確かになにかがある。
「ん～？……！！イデア！人間だ！―って、あ、ちょっ！」
ジルが驚きの声をあげてイデアのほうを見たとき、イデアは既に身に纏った鎧を手早く脱ぎ捨て川に飛び込んでいた。いち早く助けなければ、あの人間は、モンスターの格好の餌になってしまう。ましてや、この川は、“ガノトトス”と云う巨大な肉食魚竜が何度も目撃されている。もしかしてら、もう生きてはいないかもしれない。――にもかかわらず、イデアは迷いなく川に飛び込んだ。そう云う性質（たち）なのだ。
冷静なようで、多少の被害も、些細な犠牲も許さない。
静かなる熱血漢。
ジルは、そんな相棒を誇りに思っている。

「そいつ、生きてるか！」
「あぁ！息はある！」
手早く人を抱きかかえ、イデアが川から戻ってきた。
「なんだ。まだガキじゃないか」

地面に、ゆっくりと、溺れていた子供をおろす。
見た目まだ、7、8歳の年端もいかない男の子だ。
「黒髪……。東の国の人間か？」
確かに、ジルの指摘した通り黒髪は東の国の人間に多い。―ただ、とイデアは首を傾げた。
「確かに髪の色だけを見ればそうだが、…服装が妙だ」
そう、妙なのだ。
東の国の人間は“キモノ”と云う名前のゆったりとした特殊な服装をしているのにくらべ、この男の子が着ている服は、どちらかと云うとイデアやジルの着ているインナーや普段着に近い。
「―っ！」
「うお！？気が付いたみてぇだ」
まだ、朦朧とする意識のなか男の子は薄目を開け、周りを見回し、
「……＃％＄＄？」
と、なにか呟いてまた目を閉じてしまった。
「なぁ、イデア。…こいつ、今なんて言った？」
ジルが尋ねてくる。
この世界の言語は国や地方によって多少の訛りはあるものの、統一されている。だが、しかし、この男の子が呟いた言葉はいままで聞いたこともない。だからイデアも、分からない。と答えるしかなかった。
よ、とイデアが男の子を抱きかかえ、竜車に向かう。
「おい、どうすんだよ」
「村につれて帰る」
「つれて帰って、どうすんだよ」
「手当て。ここに放っておくわけにはいかんだろう」
荷台に男の子を寝かし、自分も乗り込む。

ジルは、後に続くようにして手綱を掴み、竜車を発進させる。

「……、生きてりゃ、その子位の歳だよな。お前の子供」

いつものガキみたいな口調でなく、ましてや、冗談めいた様子もなく、ジルは呟くように言った。

「――あぁ、そうだな」

それだけの会話を交わした後、ジルは何も言わずに竜車を進め、イデアは眠りに落ちた。

時間は少し巻き戻り、場面は変わる。

地球の、日本と云う国の、とある県にある海に面した田舎町。季節は冬。

藤咲雅人は焦っていた。

「く、…くそ！」

正しくは、現在進行形で焦っている。

その事態は、やたら急で、長い坂道を下っている途中で起こった。

自転車の、ブレーキが、……壊れていたのだ。

「このっ！と、止まってよ、このっ！……うわぁ！！」

かろうじで乗っている自転車のハンドルをきり、障害物を避ける。そして、再度ハンドルのレバーを握りこみ、ブレーキを掛ける。しかし、何度やってもブレーキにかかる負荷は皆無。カシャカシャと空しい音を立てるだけだった。

坂の斜が終わり、眼前に道路を挟んでガードレールが迫る。迫ってくる。その先には、一面海が広がっている。

待っているであろう結果に雅人は、背中でイヤな汗が流れるのを感じた。

坂の一番上から下りてきた、ブレーキの壊れた自転車は、スピードを殺すことなくガードレールに突っ込み、反動で雅人の身体は前方に放り出される。先にあるのは切り立つような崖。投げ出された雅人は宙を数秒舞った後、自由落下で海へ強制ダイブとなる。そして、明日の朝刊の地域の話題ページには『小学2年生の男の子が不慮の事故により、崖から海へ落下』の記事が踊ることになるだろう。

道路の真ん中まで出て雅人は左右を確認した。車が突っ込んで来てくれれば、崖から落ちるより生存率は僅かながらも高まるだろうという期待を込めて。

右を見る。車はきていない。

左を見る。車はきていない。

どうしようか。多少の擦り傷や打撲や骨折は大目にみていっそのこと自転車から飛び降りようか。と考え、前を見やったその時にはガードレールは目の前。

雅人が自転車から飛び降りよう。と決心したと同時に、彼の身体が宙を舞った。

ぐわん。と景色が奇妙に動き、空の青さが見えたと思った時には

真下の海の波が写った。
そして襲いくる、落下の際の不快な下っ腹をえぐる様な浮遊感。
「――う、うわぁぁぁぁぁぁあああああああ！！！！」
ぐんぐんと海面が近づいてくる。
雅人の落ちた高さからだと、海面は壁のように堅い感触がすることだろう。加えて、波に削られた岩に身体を打ち付けることにもなるだろう。
もうだめだ。もうだめだ！もうだめだ！！もうだめだぁぁぁああ！！！
雅人がこれから襲いくるであろう死の衝撃に目を瞑ろうとした矢先、彼の視界にキラキラと輝く細長い黄色の布が見えた。
辺りを見ると、雅人の周りを囲むように色とりどりの布が見える。
「た、たす、け」
溺れる者は藁をも掴む。
雅人は、それがなんなのかも分からないまま、無我夢中で見えた布を一枚掴み、ギュッと目を閉じた。
「あぁ、ぼく死ぬんだ」と心の中で呟いた後、雅人の意識は闇に落ちた。
トスン。という優しい衝撃で雅人は目が覚めた。
なんだろう、身体が凄くおもい。目を開けるのだってツライくら

いだ。
かろうじで目を開けると、コゲ茶色の髪をもつ男と、燃えるような赤い髪をもつ男が覗きこんでいた。頬をうつ感覚は、雨だろうか。
「#$!?&%#%」
男の言葉に、なんて言ったんだろう、英語かな？内心首を傾げる雅人。そして、周りの景色を見て驚く。
明らかに自分の住んでいた町と違う。
テレビで何度か見たことがあるジャングルに似ている。
「……ここどこ？」
疲労からか、雅人はそれだけ呟くとまた闇に落ちた。

藤咲雅人。8歳。小学2年生。男。
が、モンスターが闊歩する異世界に迷い込んだ瞬間だった。

Ａｃｔ．０　プロローグ（後書き）

はい、櫻木です。
ＦＦに選んだモンスターハンターシリーズですが、簡単に言うと、むしゃくしゃして書いた作品です。だって、巷ではトライだのなんだのって、てんやわんや大騒ぎだってのに、作者はＷｉｉ持ってないんです。つまりは、プレイできないんです。そのせいで、鬱憤が溜まりに溜まって……。それで、この作品で発散しようと思った次第であります。あと、ギャグやら、主人公ハーレムが書きたいが為に出来た作品でもあります。終着点はまだ見えていません。たぶん、最終回は、無いんじゃないかなぁ。とか思ってます。あと、一応異世界にトリップしてしまった主人公ですが、基本、物語の進行上関係ありません。
では、長くなりましたが、これにて後書き終了です。
初回と云うことで、堅苦しくなってしまいましたが、次回からは、前、後書きはもっと短く、作者の性格は崩れて、馴れ馴れしくなっているはずです。では、どうぞヨロシク。

Ａｃｔ．１　帰郷　幼馴染からの洗礼（前書き）

どうも、どうも。
どこで区切っていいのか分からず、ダラダラと書いてしまいました。
スンマセン。

Ａｃｔ．１　帰郷　幼馴染からの洗礼

世界の中心に位置する『帝都』。四方を山に囲まれ、天然の盾と化している地に栄える最大の都。そのうえ、帝都全体を砦で囲み、バリスタや竜撃槍などの対巨竜装備も、どの大都市に勝るとも劣らない最上級のものを揃えた、この世界を象徴する都市である。

この帝都は、３ブロックに分けられている。分けられているとは言っても、それぞれが街と言っても良いほど巨大な為、“区域”でなく“都市”と呼ばれる場合もあるが。

１つのブロックは、世界中の食材や商品を筆頭として、様々な物が一同に介し、世界中に運ばれる商業区域『カーナス』。

１つのブロックは、世界の方針を決める政治が行われ、有権力者や貴族が暮らす特権階級区域『セイラム』。また、セイラムの中心には、王族が暮らす、厳重な警備に囲まれた『アウリィエム』と云う城もそびえ立っている。

１つのブロックは、様々な思いを心に秘め、ハンターを志す若者に基礎知識を学ばせる世界でも数少ないハンター養成所。その中でも世界一を誇るものを抱え、また、世界中のハンターが憧れる、ハンターの聖地と呼ばれる猟人区域『ドンドルマ』

その帝都から、北西の方角に、陸路と水路を合わせて２週間ほど行った所にある地。そこには、穏やかな時間の流れる丘稜地域『シレフ森丘』が広がり、すぐ後ろには１年を通して山頂に雪が積もっている雪山『レーナ雪山』がある。

そんな２つの気候が同居する丁度中間の地域に、村人がやっと１００人居るかどうかと云う、小さな村がある。村の名を『アルバ村』と云う。

アルバ村の構造は、３段になった特殊な崖に造られた村で、崖を

切り出した石階段があり、上へと上れるようになっている。1、2段目は、民家、店舗、集会所などが有り生活に不自由なく、一番上の3段目は広場になっていて、祭などの行事を行う際に使われたり、子供達の遊び場となっている。また、そこからグルリと回る形で歩き、坂道を下ると、村の入り口に戻ってくることが出来るようになっている。

雪山からは枯れることなく雪解け水が流れ、川となっている。そこで釣れる川魚も清流に住んでいる為、比較的安全で、食用として村人に好まれている。段差によって生じる滝も好評で、癒しのスポットとなっている。

気候は、夏場は割りと涼しく、冬場は雪が被害にならない程度に降り積もる。

あまり知られてはいない辺境の村だが、住めばなかなか良い村である。

シレフ森丘の中腹を一台の竜車がゆったりと走っている。

積荷を運ぶ草食竜アプケロスは、少々の疲れを見せた様子で、口が半分開き、そこから舌が覗いている。

「大丈夫かい、ハング？」

操る騎手の少年が心配そうに訊き、竜車を止める。アプケロスは

しゃがれた声で、くぅ。と鳴き、膝を折った。
「そうか、やっぱり疲れたか」
少年は竜車から降りて、アプケロスの顔を優しく撫でた。
それもそうだ。いくら1週間休みなしに歩き続けることのできるアプケロスと云えども、ハングは、十年以上は現役で積荷を引き続けている。若い頃ならいざ知れず、老いた老体に5日間歩き続けは流石に堪えたようだ。
「ごめんな」
積荷から水と干草を運び出し、ハングに与えてやる。
「お前も、そろそろ引退かい？」
少年がそう訊くと、ハングは非難するように鼻先で少年の頭を小突いた。
「ははっ、ごめん、冗談だよ」
ハングの頭を撫でて、騎手は立ち上がる。そして、長旅で凝り固まった身体をほぐすように、思い切り伸びをする。着ている防具【バトルシリーズ】が、カチャリと音を立てた。

風が吹き、少年の黒髪を揺らす。
空気を思い切り吸い込む。春の芽吹きの匂いが鼻をくすぐった。

少年は、久しぶりに故郷の空気を感じ、自然と笑みを零した。あと少し。本当にあと少し歩けば、懐かしい故郷の村に着く。あと丘を1つ越えるだけで……、少年は、笑みを深くした。
「もう少しだな、ハング。夜になる前に余裕で着けそうだ」
ハングは、さっきより幾分か元気な声で、くぅ！と鳴いた。
「帰ったらまず、義父さんの墓参りに行かないとな」

水と干草を片付け、さあ、出発しようか。とハングに少年が声をかけたところで、森の茂みが、ガサガサと揺れた。

とたん、場に緊張が走り抜ける。
少年は竜車から静かに降り、自分の背に挿している長太刀に手をかける。

は、と短く息を吐き、揺れる茂みに意識を集中する。何が来る。揺れ方からして、大型ではない。2日前に通った中継地点では、ここ最近のシレフ森丘にはドスランポスやドスファンゴのような中型危険モンスターは確認されていないと言っていた。ここの気候からして、生息するモンスターは大体の予想がつく。良くて、アイルーやメラルー、モスのようなあまり凶暴ではないモンスター。悪くて、ブルファンゴ。こいつなら対処できないこともない。最悪の場合は……。

少年は、息を殺していつでも迎撃できるよう、武器の柄を握った。

茂みから出てきたのは、鮮やかな青い鱗に赤いトサカを持つモンスター、“ランポス”。なにやら頭を使って己の餌となる何かを転がしているようだ。

少年は、予想していた最悪の敵に奥歯を強く噛んだ。背中に厭な汗が浮かぶ。

鳥竜種に分類されるソイツは、常に3、4匹の群れを作って行動し、獲物を見つけると驚くべき連携で、執拗かつ狡猾に捕らえる。ハンターでない者は、出会ったらいち早く逃げろと教えられる、もっとも身近で危険なモンスターである。

ハンターであると言っても、ついこの間養成所を卒業した、駆け出しの初心者ハンターである少年は、後ろのアプケロスを守りながらランポスを殲滅できる自信は五分(ごぶ)だった。

しかし、予想に反して現れたランポスは1匹。稀にいる、はぐれランポスと呼ばれる群れから追い出されたランポスのようだ。

少年は、事態が最悪より脱したことに、安堵の息を漏らした。し

かし、そこで思い直し、武器の柄をもう一度強く握り直す。1匹だからと云って油断してはいけない。種による結びつきが強いため、救援を呼ぶ鳴き声を上げれば、聞いたランポスは必ずそれに答え、駆けつける。救援を呼ばれたら、アウトだ。

まだ、ランポスがこちらに気づいていないことに感謝した。大丈夫だ、一匹なら余裕で対処できる。

少年は、一撃で仕留める為に、ランポスとの距離を一気に詰め、その首目掛けて背中に挿す長太刀、【鉄刀】と抜き放つ。

抜刀からの、袈裟切り。

寸分違わずにランポスの首を刎ねるはずだった。だが、刃は虚しく空を切った。

殺気を感じてかランポスは、寸でのところで前へと、弾けるように跳んだのだ。

舌打ちを漏らし、少年は、前に跳んだランポスを素早く視界の正面に捉え、太刀を下段に構える。ランポスは忌々しげに少年を睨み、体制を低くするようにして唸る。

静寂。睨みあい。互いが互いに相手の一挙一動を見逃すまいと神経を集中する。しかし、そうしていたのは、わずか3秒ほどのこと。先に動いたのは、ランポスだった。足の鋭い爪で少年に襲い掛かるように前方に跳躍。しかし、少年は予期していたかのようにそれを横へと回避してやり過ごし、着地して隙が生じたランポスのわき腹を切り上げる。

グギャァァ！

鱗もろとも肉を切り裂かれたランポスは苦悶の声を上げ、少年から距離を取る。そして、空を見るように頭を上げ、口を開いた。救

援を呼ぶ気だ。
「っ！させるか！！」
少年は、太刀を胸元まで引き上げ、地面と水平なまま前へと突き出す。
その長いリーチを最大まで使った、突き。その刃は今度こそランポスの急所を抉った。

「はぁ、……、ふぅ」
張り詰めていた緊張の糸を緩め、鉄刃を一振りし、刃に付いた血を飛ばしてから鞘に収める。そして、たった今仕留めたランポスを剥ぎ取りに掛かる。どう云うわけか鳥竜種は、絶命すると1分もしないうちに腐敗が始まり、あっと言う間に骨まで土に還ってしまう。特殊な分泌液をだしている。だとか、異様なバクテリアを体内に飼っている。だとか、その理由は未だ究明されていない。

比較的良質な皮と鱗を数枚剥ぎ取り、戦闘中岩陰に隠れていたハングの下へ駆け寄る。と、その時足に何かが当たった。見れば、最初ランポスが運んできた餌なるものだ。
「え？タマゴ？」
それは、片手で抱えられる位の大きさの卵だった。
飛竜のそれより小さい。かと言って、モスやブルファンゴのタマゴはもう少し小さい。ランポスが、幾ら腹がへっているからと言って、同種のタマゴを食べるとは考えられない。と、言うことは――
「アプケロスの…タマゴだ！」
ハンターは、自分用のアプケロスを持つことも多くはないがあるらしい。大都市に行けば子供のアプケロスを売っている場合があるが、かなり値が張る。しかし、タマゴがあるなら別だ。人の手で孵化させることもできると聞いたこともある。
少年が今、旅を共にしているハングは、死んだ義父さんが持って

いたものだ。ハンターとして独り立ちしたことだし、自分用のアプケロスを持つのもいいかもしれない。
思わぬ拾い物をした。
ニヤケ顔で、ハングに「もう少ししたら、お前に仲間ができるかもよぉ」と言い、積荷の中に置き、そのまま、村に向けて出発した。

太陽が真上を少し通り過ぎた頃、少年はアルバ村の門をくぐった。
昼過ぎと云う時間のせいか、いつもよりゆったりとした時間が流れているように感じる。
竜車の上から周りを見回すと、民家の並びが変わっているだけ。ほとんど面影が残っていて、少年は帰ってきた。と、感慨に耽っていた。1段目は、全くと言って良いほど変わっていない。じゃあ、2段目はどうだろう。3段目の広場は――
「あの！旅の人ですよね！どうしたんですか？こんな村に」
後方から声が掛かった。積荷の横から覗くようにして、声の主の姿を確認する。
「ねぇ！できれば、竜車を降りて、手で引いて歩いてくれると助かるんだけど！」
鈴の音を転がしたような明るい、ハキハキとした声。見ると、まだ幼さの残る顔立ちをした少女だった。
少年は、その姿を見るや否や目に歓喜の色を滲ませて、竜車から跳び降りた。
少年は知っている。この少女を。

記憶に残る少女の姿は、父親譲りの深紅の髪を男の子のように短くし、体つきも顔立ちもまだ幼い子供のそれだった。
しかし、目の前にいる少女は、どうだろう。
記憶とは違い、深紅の髪をふんわりとしたボブカットにし、声も

少し変わっている。身長は相変わらず小さいままだが、一回り大きくなり、まだ発展途上らしい小さな女性特有の膨らみもあった。
記憶とはどんなに違い、子供から女の子らしくなっていても、見間違えるはずがない。1つ年下の幼馴染。
「ニル！ただいま！！」
少年は、満面の笑みで目の前の少女に告げた。
「えっ、――マサト兄ぃ……」
懐かしいその呼び名を聞いて、やっぱり、ニルだ。と嬉しそうに言う。
本当に何もかも変わっているようで、変っていない。
「うん！そうだ――」
「こぉんの、バカァァァ！！」
久しぶりの再会にも関わらず、待っていたのは抱擁ではなく、その小さい身体を捻って打ち出すビンタだった。
「へぶぁ！！」
小さい頃から、時々暴力的な面はあったが、その威力たるや、村から離れていた4年で、人をビンタだけで1メートルほど吹っ飛ばせる位に向上していた。
「い、いってぇぇ……。久しぶりなのに、なにすんだよ、ニル」
吹っ飛んだ少年を見下すようにして、ニルは言う。
「なにか言うことは？…マサト？」
本当に変ってない。怒るとすぐに手足が出て、僕のことを“マサト”と呼び捨てにするところも……。
マサトは、懐かしい思いに駆られながらも、何故、幼馴染怒っているのか分からず、苦笑いするだけだった。
「えっと……、た、ただいま。ニル」
「久しぶり。そしてお帰りなさい、マサト。…で、なにか言うことは？」

Ａｃｔ．１　帰郷　幼馴染からの洗礼（後書き）

はい。
いやぁ、戦闘シーンは難しいいですね。何度も書き直したのに、まだ、納得いきません。
こんなんだったら同時連載しているロボットものの戦闘シーンを書くのがイヤになりますね。全く。

さて、話は変わって
今回は、最後の方にヒロインの１人である“ニル”が出てきました。
ツンデレ……になる予定はないです。まぁ、それに近い性格にはなるでしょうが。

Ａｃｔ．１　帰郷　幼馴染への疑問（前書き）

遅れに遅れて、すんませんでしたぁぁぁあああ！

Ａｃｔ．１　帰郷　幼馴染への疑問

「た、ただいま。ニル」
「久しぶり。そして、おかえりなさい。マサト。で、なにか言うことは？」

久しぶりに帰郷し、幼馴染と再会をはたしたマサト。
しかし、なにか、思い描いていた再会と違う。なぜ、僕はビンタをされた？

「えっ、……と」
もちろん、言ってあげたいことは、山ほどある。
まず、久しぶり。そして、月並みの台詞だが、元気だった？と訊く。そのあとは、大きくなったね。だとか、僕のいない間、村は、みんなは、どんな感じだった？だとか。そして、なにより、綺麗になったね。と言ってあげたい。昔みたいに頭を撫でてあげたい。

しかし、どうだろう。
目の前のニルから発せられるオーラは、ランポス１匹くらいなら昏倒させられるんじゃないかと思うほどの危険色。非常に恐怖を感じる危ないものだった。
下手なことといったら、こ、殺されるっ……！
マサトは、背中に流れる冷や汗を感じながら、必死に頭の中で語彙を探っていた。

「よぉ、ニル！旅の人捕まえてなにやってんだ？」
マサトに一筋の光明がさした。

この声、……、
聞き覚えがあるっ！！……、ジルさんっ！！

「ジルさんっ！！」
マサトは、すばやくニルの横に立ち、声の主に手を振る。振られた側は、眉根を寄せて訝しげに、マサトを見たあと、驚いたように目を丸くして、駆け寄ってきた。

「おま、マサトかっ！？」
赤髪の男――ジルは、マサトの肩を掴むと、顔を覗き込むように近づけた。
「はい！お久しぶりです！」
「はぁぁ、でっかくなって！オレと身長変んねぇじゃねぇか！」
ぐわん、ぐわんと、筋骨隆々の腕で、マサトの肩を力任せに揺する。めまぐるしく視界が動き、目が回る。
「……あ、あの」
「手紙じゃ、到着予定は3日前だっただろう」
「こ、これ。やめ」
「心配したんだぞ！」
「やめ、…や、……ジルさ…」

「道中モンスターに襲われたのかと思って、村のみんな、気が気じゃなかったんだぞ！」
「…う、うっぷ……」
「お、お父さん！マサト兄さんがっ！」
娘のニルの言葉に、ハッとジルが我にかえる。
「いけねぇ、村のみんなに知らせないと！ニル！お前は村長さんに伝えてくれっ！」
「う、うん」
マサトに対するお説教の途中だったので、ニルは歯切れ悪く返事をして、役場へ駆けていった。
マサトからしたら、ジル様様だ。
……様様なのだが、目が回りすぎて、あまり素直に感謝の言葉を言う気になれなかった。

ふぅ、ふぅ。と浅く息を吐いて気分を落ち着ける。
「――マサト」
とジルから声がかかった。
「お前、いくつになった？」
「もうすぐ、17になります」
そうか。と短くジルが答え、
「マサト。よく、帰ってきた！」
子供のように顔をクシャクシャにして笑い、乱暴にマサトの頭を撫でた。
「この前手紙に書いた通り、オレはもうハンターを引退した。これからは、お前がこの村を守ってくれ。――頼りにしてるぞ、新米！」
「……」

父親が息子にかけるような優しい言葉。なにより、かつて、自分の義父とチームを組んでいた一流ハンターからの、責任を預ける言葉。その、ジルからの思いをしっかりと噛み締め、マサトはジルの目を真っ直ぐ見て、

「――はいっ！！」

と、力強く答えた。

そんなマサトのことを嬉しそうに見るジル。

「やっと、引退した気分だ……、じゃ、ちょっくら村のみんなにマサトが帰ってきたこと知らせるから、お前は、竜車をイデアの家に置いて来い」

「今日は、歓迎の祭りだぜ」と、去っていくジルの背中に向けて、マサトは小さく「お疲れ様でした」と、呟いた。

と、いい感じに会話を終えそうになっているところで、マサトは忘れかけていた疑問をジルに尋ねる。

「あのぉっ！ニルが、なんで怒ってるか、分かります？ジルさん！」

ジルは、首だけ振り返る。そして、すこし思案するような顔にな

った後、ニヤリと笑って
「オレぁ、知らんねぇ！」
と答えた。
どう考えても、「私は知ってますよぉ～～」な顔だ。そんな顔で言われてもまるで信憑性がない。
マサトは浅く溜め息をついた。
「仕方ない。自分でなんとかしないとな」
叩かれた頬を擦って、ハングの横に立ち、手綱を引いて歩き出す。
頬が未だ放つ熱を感じながら、幼馴染の怒りの原因を、う～ん？と考える。

家までの僅かな道のりの間、マサトに気づき、声をかけて来た村人はチラホラといた。その全てにマサトは笑顔で再会を喜び合い、握手または抱擁を交わしたりした後、ニルの怒りの原因を聞いてはみたのだが、本当に分からないと云う風に首を振る者と、ジルのように、にやぁ～。っと笑ってはぐらかす者。どちらかの反応だった。

そんな反応を見ていると、マサトはますます分からなくなった。
ここを出るときに約束した、毎月手紙を書くって云う約束も破ったことがないし、必ず帰って来るって云う約束もたった今果たした。…じゃあ、なんだ？なんでニルは怒ってるんだ？
首を傾げる毎にマサトの頭にハテナが飛ぶ。
いっそのこと、ベタ褒めしてみようか……
養成所時代のチームメイトが言っていた「女が機嫌悪ぃときは、だいたいベタ褒めすりゃ機嫌がなおる」と言っていたのを思い出し

た。
いや、ダメだ。
1秒の思案の結果、その案は却下。そのチームメイトが、そんないい加減な物言いでもう1人のチームメイトである女の子に張り倒されていた。
……どう云うわけか被害を受けるときは、いつも僕も一緒にだったけど……

有無を言わずに、土下座してみよう。の案が有力になってきたところで、自分が住んでいた家に着いた。
一段目の端のほう。滝のすぐ近くにある2階建ての家屋。それを見た途端、マサトは懐かしい衝動に駆られ、ハングを家の横の水場に結び付けて荷物もそのままに、家に飛び入った。

「ただいま！！」

住んでいる人間がいないのだから、返事が返ってくるはずがないが、それでもマサトは寂しさを感じなかった。
グルリと我が家を見回す。
右を見るとすぐに台所。左には背の低い大きなテーブル。奥には部屋が1部屋、イデアの部屋だ。そして、小さい風呂もある。
階段を上がって、2階へと上がると4部屋あり、階段を上がって左手前がマサトの部屋となっている。

マサトは、自分の部屋に駆け込むと、ベッドにダイブした。帰ったらやりたかったことの1つだ。
温かい。

にんまり。と満足そうに笑う。
まるでさっきまで干してあったかのようだ。埃すら舞い上がらない。思えば、４年も家を空けていたのに、家の中は埃臭くなく、綺麗で、昨日まで人が住んでいたかのようだった。
「はふぅ……」
しかし、マサトは、そんな疑問なんて気にもせず、先ほどまで考えていた幼馴染への疑問も、まどろみの中に消えていった。
そして、マサトは長旅の疲れか、すぐに眠りへと落ちた。

Ａｃｔ．１　帰郷　幼馴染への疑問（後書き）

やっと更新できました。
クオリティ低いうえに、遅くなって、すんません。

でも、言い訳を聞いて！
本業学生なもんでして、夏休み終わっちまって……

ごめんなさい。
やっぱ言い訳はいくないです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7772h/

僕らがいる世界

2010年10月9日02時54分発行